

# 香蘭

## 香蘭

2019年(令和元年)5月号  
第96卷 第5号 通巻1061号

### 目次

村野次郎作品 私の愛誦歌(45)	鈴木(桂)・伊藤(康)・石井・坪・大井田・西野・坪倉・水本・黒羽(絃)……2
作品一特選(五月号)	
作品二・三特選(三月号)	岩田・江口・松沢・三澤・丑山・小原・小林(純)・庄司・中村(陽)・馬場……4
作品	一……6 二……22 三……31
推薦香蘭集	38
香蘭集	39
歌の生まれる場所(76)	満木好美……19
村野次郎への旅(110)	千々和久幸……20
エッセイ 歌集『滑走路』——萩原慎一郎氏を知る	鈴木桂子……44
七首抄(三月号)	清水・杉山(伊)・安田・藤本……47
魚点(三月号)	桜井京子……48
作品一特選欄評(三月号)	渡辺礼比子……50
作品一	市川義和……52
作品二	岩田明美……54
作品三	斎藤俊子……56
香蘭集	小笹岐美子……58
緑地帯	富田(勝)・野口・東西・庄司……60
転載 西野美智代歌集『若苗色』評	紺野裕子……63
明宝研究会第一〇四回二月例会	内藤美也子……64
他誌拝見 102	松田恭子……70
他誌に掲載された香蘭会員の作品と動き	
歌会及び会合・会員消息・他	
編集後記	
表紙絵……中村陽子「鏡を置けば……」	78・表三
目次カット	
和田和雄	



2019年(令和元年)5月号

第96卷

第5号

通巻1061号

### ベトナム戦批判する声はげしけれど

### 所詮は生死に遠くゐる声

『村野次郎歌集』

昭和四十年の作品。ベトナム戦争の始まりは諸説あるが、この歌は開戦間もない頃の作品である。トンキン湾事件をきっかけに米国が北爆を開始し、カンボジア、ラオスを巻き込み昭和四十八年、アメリカの撤退まで八年以上続いた戦争である。当時は日本でも市民運動が盛り上がり、ここ新宿周辺でも血気盛んな若者たちの反戦運動が盛んであった。

村野先生はこうした反戦運動を近くで見ながら、所詮自分たちの生死に係るものではないと少しさめた視線を向けている。太平洋戦争を経験した世代には、こうした反戦運動には違和感があったのだろう。

昭和五十五年から日本に定住するためのインドシナ難民に十七年余関わってきた。生きるために日本語を学ばねばならなかった彼らに教えるより、どれほど多くを学んだことか、先生の一首が思い出させてくれました。

## 四 選 者 の 作 品

梅園にて 平塚 千々和 久幸

拵酒がほどよく売れて梅園の宴が遠く近く膨らむ  
酒に酔いたそがれ近き梅園の湿れる草を踏みて帰るも  
七階のレストランよりたそがるる春近き森しばらく眺む  
テンパイに遠い人生 死ぬまでに人事を尽くすなどあり得ぬに  
我を張るはほどほどにせよと咎めしに「さうは参らぬ」という願をせり  
事実より少しずらして伝えおりの人がつねそうするように  
変哲もなき日の続きに咲き出でしさくらは桜の日日を華やく  
ただいまと低く吹き誰も居ぬ薄暗がりの部屋のドア押す

集合写真 東京 桜井京子

見落としし誤植のやうな口惜しさが時折ささず定年の後に  
ひとしきりカンツォーネの響き高くなり待っても来ないやうな気がする  
明け方のおもはぬところに半月がほんやりと浮くあれはわたしだ  
交代で集合写真を撮りあへばすなはち一人が写つてをらす  
水門を壊す工事をしてゐます冬の日差しは踊つてゐるが  
東京五輪の工事始まりもうやつて来ないのだらう水辺の鳥は

八つ当たりしてよい相手あるならむ咲いては散つて白山茶花は  
京王線国領駅の駅前のロータリーにいま冬の夕陽

命 日 横浜 渡辺 礼比子

過密なる二月の日程消化せりパンシロンなどに飲みつつ  
風邪癒えて四日遅れの豆を撒く靈験のほどはさだかならねど  
窓口の日中辞典傷むまで新宿駅員忙しき春節  
会員の表情冴えず発言量を半分ほどに抑えんとする  
まだ下手な歌詠んです 杏咲き飯田先生の命日近し  
貸し倉庫に韓流グッズを隠し持つ良妻賢母のままにて友は  
二月には「二月逃げる」と書き起こす友の便りが今年まだ来ず  
老い母の誕生会せり子らのみがケーターリングにいたく足らいて

水 鳥 鎌倉 香山 静子

何人も留める術なき歳月の彼方に光る兄の白髪  
父ははも兄も姉も揃ひぬし北のはたての海見ゆる家  
たつた一度母に叱られ海見ゆる丘にのほりて泣きし少女期  
あと十分あと五分と言ひて床出でずわが残年を教へることも  
ひそひそと春の雪降る地に落ちし椿の花にも艶めく葉にも  
山頂より駆け下りて来しひと幅の風は小草を均しつづつ過ぐ  
色とりどりの落葉に埋もるる公園の一隅 例へば冬の曼茶羅  
水鳥の描ける水脈に池の面はきらめく一枚の画布となりたり

# 作品一特選



(四月号作品、五選者共選)

子 西宮 鈴木 桂子

がんばれと今日も見送る窓下のたつた三人の登校班を  
 部屋内にはのか匂へり差しおきし日本水仙の一輪が咲く  
 寝返りを打ちつつ未明しんしんと背の冷ゆるを きみもひとりか  
 疲れたと夜ごと娘の言ふ からつばになりて眠れよ 母も眠らむ  
 夫の靴在りし日のまま いま夫によく似る息の靴が隣にならぶ  
 ほほを吹く早春の風に目をやれば白くけぶれる六甲の山  
 マヨネーズ、鯉節、青のりたつぶりの春のたこ焼き 息子と食ぶる  
 「冬美人」 東京 伊藤 藤康子

紅椿のランチョンマットに並べらる十二品なる「冬美人」 コース  
 乾杯のワイングラスの音ひびき「冬美人」 たちの睦月の歌会  
 それぞれに背負うものゆえ不参加の歌友たちこそ「冬美人」なれ

デコボンになりきれなかったデコみかん沢あり品とてネットで売らる  
 熊本より三日をかけて運ばるるデコみかん入りのくまもんの箱  
 豆まきはしないで豆を食べている ザーっと鬼はわが内にあり  
 奉祝の十連休に休めたら 皆あちこちで小声で話す  
 不來方 習志野 石井 雅子

学校から帰る子ども声聞けばあたりの景色がやはらかなる  
 「有りふれし菌食し」と其角記す元禄七年芭蕉の死因  
 不來方の啄木の碑に雪つもり「十五の心」も凍えてをらむ  
 雪深き「酸が湯」が映る真夏日にバスを待ちぬしバス停見えぬ  
 女らしさ求めることはあほらしい山口誓子男らしく書く  
 えー 野獣がアイス作るんだ柔道家松本薫はスイーツが好き  
 トランプがノーベル平和賞だつて推薦したのは日本のアベ  
 やつぱり嫌い 東京 坪 裕

枯芝に落ちし雪片少しだけためらいながら消えてしまえり  
 UFOが大挙襲来することく夏蜜柑の実のたわわにみのる  
 緑濃きプロッコリーは栄養が豊富なれどもなぜか嫌いだ  
 角が取れ丸くなったと思つたがあいつのことはやつぱり嫌いだ  
 辺野古の海に土砂投げ入れて埋めてゆく憲法九条消さんがために  
 県民の強い民意だ安倍総理辺野古「反対」72%  
 民意など通ずるはずなく辺野古の海沖縄なれど沖縄でない

菓 鴨 川崎 大井田 啓子

参道を行く人だれも楽しげにテレビカメラに笑つて見せる  
 どの人も大口開けて笑ひをりテレビの中の菓鴨楽しも  
 多摩川の鉄橋わたりともかくも菓鴨目指せり立春過ぎぞ  
 かばん屋のとなりはテナント募集中地蔵通りはゆつたりと春  
 御利益がなにかあるらし一角の洗ひ観音の行列につく  
 商店の名入り提灯掲げあり末尾に大正大学の名が  
 参道の入口の小さな乾物屋大正大学の学生が商ふ

鬼 東京 西野 美智代

(どう)にかできませんか)とぞ訴へし子を見殺しにしたりわれらは  
 ちちははを鬼に変へしは何ならん心愛ちやんの名に愛の字入りぬ  
 あの人をノーベル賞に推すなんて次を狙つてゐるやも知れぬ  
 敗戦を終戦と言ふこの国の統計だもの何の是式  
 結婚の決め手となるは米の値と統計学に諭吉が説けり  
 その母の胸に張り付き眠る児の行く末にゆめ戦ひあるな  
 返信の直後返事のメール来る繋がることはつながられること

寝 正月 ふじみ野 坪 倉 寛

幸運と聞かされ脳の画像見るストレッチャーにて首のみ振り  
 即入院の宣告をうけ平成の最後はこれか寝正月なり  
 両腕に点滴受けつつまどろめば頭痛はかなり軽くなりたり

六日間絶対安静の寝台は思考も歩行も奪ひ去りたり  
 ベッドにて三度の飯を欠かさねば排泄物はたれ流すなり  
 削岩機に似たる音たてMRIは出血したる脳を精査す  
 宿直があと五分にて新年と用足して来しわれに声かく  
 朝霧は 倉敷 水本 美恵子

死化粧をせし姉に似て美しき喪主なる人は横浜ずまひ  
 朝霧は小さき庭より晴れてくる椿の桃色ボケの赤より  
 まだかたき蒼のキブシ目を覚ますまでを庭の瓶につけ置く  
 はつぽつとキブシが黄色にひらく頃山が笑ふと空気がゆるむ  
 誕生日を迎へる夫も側の吾もたしかな老いを重ねるばかり  
 遮断機が寒気もろ共押し上がる下をくぐりて体操に行く  
 庭の木にみかんの半切り押しおけはヒヨドリが来て時々メジロ

二月の雪 常陸太田 黒羽 絃子

頂きしスイートピーの五十本ビンクにイエローパールもある  
 如月の部屋は今年も花ざかり常陸にどとく友のまごころ  
 平成の初めに逝きしわが夫も間もなく平成が終りてしまふ  
 亡き夫にバレンタインのチョコ供う二月の雪に逝きにし夫に  
 スイーツとおしゃべり主役の今日の会主婦でも妻でもなくて私  
 この庭に幾年経たるか未実たく万年青に二月の雪降りしきる  
 払うもの何一つなき白樺は枝先までも雪のせており

# 作品二、三特選



(三月号作品から) 丸山 三枝子 選

## 〈作品二〉

雲は金色 安来 岩田 明美

一本で六つの効果の化粧品これだけ塗りで今日のスタート  
見目のよきかほちや選びて残しおく冬至近づく納屋の片隅  
〈気がつけばおかげさまの中〉とふ和菓子お陰さまです師走の歌会  
孫悟空が乗つてゐるかと思ふほど夕日に輝く雲は金色  
わが町にただ一軒の洋品店覗いてみればベレー帽がある  
ひとつだけ売られてゐたるベレー帽なららと被り手をふり帰る  
・睡みの表現に新鮮な、或いは温かな情感が滲む。

鷗外記念館 柏 江口 絹代

団子坂をそろりと上り息つけば鷗外記念館は目の前にあり  
文豪の子に送りたる手紙などを見れば存外ふつうの父なり  
千駄木の観潮楼の石だたみ軍医となりて出て行く鷗外  
鷗外の子らも買いいしか鉛細工の店が残れる千駄木の町

## 〈作品三〉

昼雨はつとに上がりて観潮楼の銀杏大樹が光りておりぬ  
昼過ぎに館を出ずれば空晴れてビルの狭間にスカイツリー見ゆ  
・鷗外への視線に親しみとリアリティーが籠もる。  
年末ジャンボ さいたま 松沢 みどり  
料理本見ながら料理するために買った本立てに香蘭誌置く  
今年こそ買おうと真顔で言う夫 テレビは年末ジャンボを映す  
台風で行きそびれたままその後の歯医者予約がまだできていない  
ぬるま湯に浸かれれば力抜けていく外はしいんと日曜の夜  
飲みこんだ涙がふいに溢れ出すたとえばコスモスに触れたときなど  
楽な道ばかり選んじやいけないと思いつつ履くのびのびジーンズ  
・滑稽と懐知に包んで詠まれた自画像が何故か切ない。

生存証明 横浜 三澤 幸子

一枚も葉のなくなりし高枝にカラスさえ来ず熟柿のあまた  
バスを降り左右に分かる病院とスポーツクラブへ通う人たち  
さしあげた毛糸はふんわりセーターへ友の魔法の手にかかりなば  
「元気で」の目標までも延ばす人オリンピックを万博までと  
人間が神の領域犯すときA I ヒトを支配しはじめ  
半世紀会おうともせず交わしあう年に一度の生存証明  
・現代を切り取り、対象へのシニカルな視線が光る。

われらは食べる さいたま 丑山 眞弓

クリスマスはしいものは貴方だけとマライアキャリーは唄っていたり  
弛緩したわれらを時折ゆさぶりぬ自然の神は地団駄ふんで  
麦食べて玄米食べて白米も食べて息子は筋トレをする  
玄関に無造作にあるヘルメット息子の頭蓋を守りて走る  
目に見えぬプラスチックを餌にした魚をつまいとわれらは食べる  
・ユーモアやアイロニーに託して物事の核心に迫る。

森の中から 鎌倉 小原 裕光

電線を一目散に走るリス由比ヶ浜より御成のまちへ  
相模の海朝の光を照り返す伊豆の山なみ遠くうかべて  
切り通しを越えて来たるか二人連れ森の中から生るることくに  
まっしぐらにキンクロハジロの泳ぎ来る餌を持たざる我はたじろぐ  
再会の日程をまず決めて同期の飲み会ようやく始まる  
・立体的に詠まれた、香蘭では貴重な叙景歌。

夢の片鱗 横浜 小林 純子

ここがさう寂しさの果て地下鉄がビルの頭上を光つて走る  
採血の針抜きされば注射器の錆朱の銅に利那みとるる  
台詞はも「クララが立つた」そのみのハイジンは何時も牛小屋  
泣くために生れて死すともアポカドの水栽培に白き芽は出て  
ポケットに未だ開かぬ五指のあり掴み損ねし夢の片鱗  
・寂しき・生・涙・夢などのモチーフで巧みに詩を構築する。

年の瀬の 横浜 庄司 健造

身の丈を知れよと言つてくれた奴ひとり酒もて献杯をする  
六錠の薬のみこむとき測る徒競走の笛を待つこと  
特別に選んだ靴にあらねども明宝ビルの五階へのぼる  
住む町のおだやかなりし一日なれ彩雲うかび年の瀬となる  
最終のバスに遅れて駅前前の灯のこれる暖簾をくぐる  
・ある年輪に運した境涯を重くなく詠み共感を誘う。

グレーの私 東京 中村 陽子

何色もの絵の具を散りばめたような渋谷の街にグレーの私  
陽の射して透ける紅葉のかがやきをスマホのレンズに見上げていたり  
裏の家取り壊されて江戸川の花火の辺りの空が見えたり  
玉砂利にあの日のあなたが蘇る明治神宮の参道行けば  
病院の待合室より見ておれば売店の人は菓子を並べる  
・日常の機微を掬い、上句と下句を巧く響き合わせる。

いつか話して 松江 馬場 美信

あかねさすこの窓の辺で待ちわびた十月をいつか話してあげる  
部屋中を君の匂いが席捲すこの世に生れて三月というに  
これまでの寵愛すべて譲ります 赤子の側にうたたねの犬  
君の見る初めての空冬の雲もうすぐ白い雪も見えたら  
人間にだんだん近くなってくる君の泣く声あすは百日  
・新しい命の誕生への賛歌、敬詞を駆使した好連作。

村野次郎への旅 (110)

「地上巡禮」と次郎 (三)

千々和 久 幸

「地上巡禮」第壹巻第貳號は、大正三年(1914年)十月一日發行。総頁五八頁の他に、巻末の広告に七頁が当てられている。

巻頭には創刊号と同様「巡禮詩社の言葉」一頁が掲げられ、その後北原白秋の「大電簿機」八首、「満月」八首が続く。

次いで古泉千燈「獨り寝」八首、河野慎吾「煙し銀河」二十八首、さらに室生犀星の詩「足」、山村春鳥の詩「曼陀羅」、萩原朔太郎の詩「純銀の奏」「鐵夫の歌」などが続く。

こう見てくると白秋が発行所を「巡禮短歌会」ではなく、「巡禮詩社」としたことが納得出来るよう。白秋は当初から、この雑誌を短歌だけではなく幅広く「日本詩歌體最高の權威ある」雑誌、として企圖したことが解る。

さてこの号には、村野先生の作品はただ一首だけである。目次にも先生の名前は無い。最初から一首だけの出詠だったものか、白

秋選に洩れたものかは解らない。ともかく「潜光」と題された貴重な一首を見ておこう。なお作品の頭に付した数字は、「地上巡禮」出詠歌の通し番号である。

⑥うすうすと海底に月はさしぬめり現世の船は海をすべるも 村野 次郎

これまでに読んできた「村野次郎歌集」とは明らかに異質の雰囲気を持つもので、村野次郎の署名がなければ他人の歌だと思いかねない。それほどにわたしのイメージにある晩年の先生の作品とは、かけ離れた雰囲気を持つ一首である。

この歌、素材そのものが珍しい上に、どこか幻想的な気分を誘う歌である。海底の神秘的で幻想的な光景と、地上の現実の光景を対比的に捉え、その間にロマンチックな気分を醸成しようとした歌だと読める。

首のみ、それに引替え白秋は五首を引いてみたが、これだけでも村野先生と白秋の歌柄、息遣いの違いはよく解る。

同じ月明かりを歌つても、構図の取り方、明るさがまったく違う。村野先生の月の光はくぐもっているが、白秋の方は真昼間のように大らかで、明るい。

一首目の「大きなる月」、二首目の「大きなる満月」、三首目の「朗なる満月」、四首目の「大きなるまん圓き月」、五首目の「あかあかと十五夜の月」のいずれも躍動感があり、まったく騎りが無い。手放しつまり無防備で、天真爛漫とさえ言える。

たったこれだけの歌で両者の歌柄全体を評価するのは乱暴に過ぎようが、ある側面は窺い知ることは出来るようか。

村野先生の⑥の歌に対する村山裕一顧問の評を引いておこう。

これは現世離れをした幻のような世界を描いている。「さしぬめり」の「ぬ」は現在完了の形であり、「めり」は想像の助動詞で、「今まさにさしたであろう」という意味になる。海底であるから月光も明るくはとどかない。

助動詞の「めり」は、「射しているのだから」くらい、影らみのある表現で断定は避けている。「現世の船は」はいやに明晰だがわたしの好みを言えば、下旬の船はもつと夢幻の彼方を航行させたい気もする。

とは言え、これが二十歳の青年歌人村野次郎が造型した詩的世界である。ちなみに同誌の師白秋の「満月」から抄出してみよう。

・ゆらゆらと空の漚うたかたにせりあがり大きなるかも今宵このよの月は 北原 白秋  
・増上寺の塔の上より大きなる満月あがり思ふ事なし

・朗らなる満月の夜に火花あがりこころさぶしもその音きけば  
・秋立ち、夏祭すでに殺し  
・大きなるまん圓き月街にありわつしよわつしよといふ聲がする  
・路次に出で水道の栓をひねる

・あかあかと十五夜の月隈なければこころもぬぎすて水かぶり屠り  
同時期に制作された村野先生の歌は⑥の一

のと決めてかかっていた。改めて己の不明を恥じ、村山裕一顧問をはじめ、「香蘭」の先達に敬意を表したい。

白秋は前記の作品の他に「貴き歌の姿」を「眞珠戒」として威音風に書き、「これは三崎の舊作なり。うめ草に抄出す」として「童子抄」八首、また4頁に亘って「玲瓏眞言」再び歌をつくる人に「を書き、「これらは三崎の舊作なり。うめ草に抄出す」として「遠樹抄」十首、さらに「満月餘光」八首、「鏡」八首、「不盡の山」八首、「巡禮提言」、「社報」と、レイアウトこそ雑然としているが八面六臂の陣頭指揮で、涙ぐましい程の大奮闘である。

巻末の「社報」から抄出する。  
「總じて歌に馴れ過ぎた人は巧みではあるが私を失望させる事が多い。熱心で誠實な人がくぐんぐん進んでゆくのは氣持のいいものだ。最後は眞實に一念一向の人が勝つ。増上慢の人に對しては私はどこまでも高飛車で抑へつける。私は嚴峻である」

「地上巡禮」はまさしく白秋が主宰する雑誌であり、白秋は意気軒昂である。

わたしには⑥の歌を、ここまで断定出来るだけの鑑賞力はない。先生の作品を知悉し、また身近に先生の人柄にも接してこなければ、このような深い読み方は出来まい。  
わたしはこのたび「地上巡禮」を読むまでは、村野先生の相聞歌に眼を留めて来なかった。いや先生には相聞歌(青春歌)が無いも